

2013ss 金曜 3 限「問答の観点からの哲学的意味論・真理論」

授業の目的：言語の意味論、真理論は、現代哲学の中心テーマの一つであり、それについての基本的な知見を提供し、基本的な問題について共に考えることを目的とする。

講義内容：問答の観点からみた「意味とは何か」という問いに答えたい。推論主義意味論、観察言明の意味論、言語行為論、問答論的矛盾、意味の全体論、真理論、などの問題を問答の観点から考察する。

授業計画

- 1, 問答の観点から推論主義意味論を再検討する。
- 2, 問答の観点なら、観察言明の意味論を考察する。
- 3, 問答の観点から言語行為論を再検討する。
- 4, 問答の観点から問答論的矛盾を考察する。
- 5, 問答の観点から意味論全体論を再検討する。
- 6, 問答の観点から真理論を考察する。

参考文献：ライカン『言語哲学 入門から中級まで』勁草書房

野本和幸、山田友幸編著『言語哲学を学ぶ人のために』世界思想社

服部裕幸『言語哲学入門』勁草書房

飯田隆『言語哲学大全』I~IV、勁草書房

入江幸男 2010ss~2012ss の講義ノート

第 1 回講義 (20130412)

§ 1 問答の観点からの真理論

真理は、伝統的には、文の事実への対応や、文同士の整合性、などによって説明されてきた。このような立場は、いずれも真理を文（あるいは言明、あるいは命題、あるいは信念）のある性質として理解するものである。そのような立場は、真理のインフレーション理論と呼ばれる。これに対して、真理を文など性質と考えない立場が、真理のデフレーション理論と呼ばれる。

1 真理のインフレーション理論への批判

A 経験的命題の真理の場合

(1) 対応説への批判

① 指示の不確定性

- ・「ガバガイ」(Quine, *Word and Object*)
- ・レーベンハイム・スコレームの定理の応用 (Putnam)

② 内部実在論 (指示の理論的負荷性)

- ・水槽脳 (Putnam)

③ 指示の不可能性

- ・スリングショット・アーギュメント (Davidson)
- (講義ノート 2012ss 12 回講義を御覧ください)

(2) 整合説への批判

- ・「自然数論の公理系が無矛盾であるとき、その公理系の無矛盾性を証明することはできない」

(3) プラグマティズムへの批判

プラグマティズムは、「真なる命題」を「有用な命題」として定義する。これには多くの問題があるだろう。例えば、矛盾する格言「大は小を兼ねる」「過ぎたるは、及ばざるが如し」はどちらも有用であるが、両方を真であるとすることはできない。

【課題：真理のプラグマティズムに対する批判ないし擁護を、ミニレポートに書いてください】

B 数学・論理学の命題の真理の場合

(1) 新しい公理主義＝規約主義

非ユークリッド幾何学の登場によって公理主義の理解が変わった。

(参照、ヒルベルトの『幾何学の基礎』1899)

- ・点、線、平面などは無定義述語である。
- ・公理は、規約で真とされる命題である。

これは、幾何学が、もはや私たちが直観したり想像したりするような空間を記述しているのではないということである。なぜなら、ヒルベルトが言ったと伝えられるように、「テーブルと椅子とコップを、点と直線と平面のかわりにとってもやはり幾何学ができるはずだ」(山岡舘郎『現代真理論の系譜』海鳴社、p. 89)。

(これによって、幾何学的真理についての対応説の終わりが言えるとしても、数学的プラトニズムの終わり、数学的真理の实在論の終わりとまでは言えない。)

(2) 規約主義のパラドクス

- ・推論規則の適用規則を明示できない。
- ・「プラス」の規則を明示できない。「クワス」問題。
- ・論理法則、たとえば「同一律」を明示できない。

(これは、クワインによる分析的真理と総合的真理の区別の否定と結びついている)

(3) 根源的規約主義

公理の真理のみでなく、全ての定理の真理、およびそれらの定理を公理から導出する推論の妥当性についても、規約として認める立場。

(これは、真理と知識の整合説および全体論の一種になる。)

(4) ゲーデルの第一不完全性定理からの帰結

「自然数論を含む公理的理論が無矛盾(言論では ω -無矛盾)であれば、その理論の命題で肯定も否定もともに証明できないもの(決定不能命題)が存在する」(山岡、前掲書、p. 96)

帰結1：これによって、「真である命題」と「証明される命題」の集合が一致しないことが証明された。つまり、「真なる命題」を「証明される命題」として定義するのではなくて、別の仕方でも定義することが必要になった。それを提案したのが、タルスキーの真理論である。

帰結 2 : 「真である命題」と「証明される命題」の不一致が生じないように数学や論理学を制限するのが、直観主義数学および直観主義論理学である。これらの体系では完全性が保障されるので、「真である命題」を「証明される命題」として定義することができる。

(したがって、「文の意味＝文の真理条件」という意味論は、直観主義論理学では、「文の意味＝文の証明条件（証明可能性）」という意味論を主張することになる。)

(5) ゲーデルの第二不完全性定理からの帰結

「自然数論を含む公理的理論が無矛盾であれば、その理論の無矛盾性をその理論内で証明することはできない」(山岡、前掲書、p. 97)

帰結：真理と知識の整合説とは、命題や信念の集合の整合性（＝無矛盾性＝両立可能性）をその集合に含まれている命題や信念の真理性であるとみなす立場である。理論の無矛盾性が証明できないとすると、整合説は成り立たない。

2、真理のデフレ主義

(1) 余剰説 (redundancy theory)

「p」ということと、「pは真である」ということは、同じことであるので、「真である」という真理述語は余剰、不要である、とする立場。

(2) 真理述語は必要である (ラムジー、Horwich のミニマリズム、など)

①一般化のために必要

「この本に書いている全てのことは、真である」

「プラトンの言った全てのことは、真である」

前者の場合には、その本の全ての文を列挙することによって、論理的には「真である」なしで済ませることができる。この場合には、真理述語は、ないと不便かもしれないが、論理的な必要性ではない。後者の場合には、プラトンの言ったことを全て列挙することはもはや不可能であるとする、真理述語を使用しないで、同じ内容を表現することは論理的にできない。

(もちろん、「プラトンの言った全てのことは、事実である (正しい、そのとおりです)」などの表現で言い換えられると考えることもできる。しかし、それは「真である」を「事実である」「正しい」「そのとおりである」などの性質で定義することであり、インフレ理論にもとづいている。インフレ理論で真理を定義できるならば、「真」を他の語で代用できることになる。

②文代用 (prosentence) の機能 (Belnap, Brandom)

「アインシュタインの特殊相対性理論は真である」

アインシュタインの特殊相対性理論である文を語るができなくても、しんりじゅつ語をもちいて、その文を語ることの代用をすることができる。

③指示が不確定であるときに、問うことを可能にする

コリングウッド・テーゼ (CT)

「すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」

これが正しいとすると、「p」は真である」という形式の言明もそれを答えとするような質問への関係においてのみ意味を持つ。その問いは、次のようなものになるだろう。

「p」は真ですか

「何が真ですか」し

「どれが真ですか」

「p」は真ですか偽ですか」
等、である。これらの問いはすべて「真」という述語を使用している。(従って、真理述語の意味を定義しようとするなら、問いに登場する「真」という概念の意味を定義する必要がある。)

では、ひとはどういう時に、「aはFですか」と問わずに「aはFである」は真ですか」と問うのだろうか。

「aはFですか」という問いは、(aがFであるかどうかはわからないが)「a」が特定の対象を指示していることを、前提している。この問いの焦点が「(他でもなく)aがFですか」であっても「aが(他でもなく)Fですか」であっても、「a」が特定の対象を指示することを前提している。従って、この問いは、「a」の指示対象を知らない場合、あるいは「a」が指示しようとする対象が存在するかどうかわからない場合には、問うことができない。このような場合には、「aがFである」は真ですか」と問うことが必要になる。

通常問いは、何らかの対象を指示できることを前提している。ただし、対象の指示が不確定であるときには、その文を指示して、それが真であるかを問う必要が生じる。

③の吟味

●予想される反論1：

対象の指示が不確定である場合にも、「真」を使わなくても、次のようにすれば、同じ内容を問うことが可能である。

「aは存在しますか。もしaが存在するなら、aはFですか」

あるいは、

「a」は対象を指示しますか。もし「a」が対象を指示するのならば、その対象はFですか」

●応答

この反論は、真理についてのある種の対応説を前提していないだろうか。例えば、次のような真理の定義を採用しているのではないか。

「aがFである」が真であるのは、「a」の指示対象が、「F」が表現する性質をもつ(あるいは「F」が表現する集合の元である)とき、そのとき限る。

●再反論

フレーゲは、語による対象の指示を認めるが、しかし、真理の対応説を批判する。つまり、語による対象の指示を認めても、必ずしも対応説を主張することにならない。Horwichもまた指示のデフレ理論を主張しており、語による対象の指示を認めるが、真理のデフレ理論をとる。

●予想される反論2

③は次のように主張していた。<「aはFですか」という問いは、(aがFであるかどうかはわからないが)「a」が特定の対象を指示していることを、前提している。この問いは、「a」の指示対象を知らない場合、あるいは「a」の指示対象が存在するかどうかわからない場合には、問うことができない。> しかし、この主張は「a」の指示対象が確定していなければ、問いが有意味ではないことを前提していないだろうか。そして語による対象の指示を認めていないだろうか。